

特別支援教育に関する研究

特別支援学級における授業の実際

— 特別支援学級スタート応援ブックの作成 —

平成23・24年度



で なっとくん



茨城県教育研修センター

目 次

1	研究を進めるにあたって		
(1)	主題設定の理由	-----	1
(2)	研究の目的	-----	2
2	特別支援学級の現状と課題		
(1)	本県の現状	-----	3
(2)	実態調査について	-----	4
3	特別支援学級スタート応援ブックについて		
(1)	学級経営編	-----	9
(2)	授業づくり編 ～授業づくりの8つの視点～	-----	12
(3)	授業実践事例編	-----	27
4	研究のまとめと今後の課題	-----	30
5	参考・引用文献	-----	31

研究協力員，茨城県教育研修センター職員一覧

1 研究を進めるにあたって

【研究の概要】

本研究は、特別支援学級や通級指導教室の担当者（以下、「特別支援学級等担当者」という。）の学習指導や学級経営における課題を明らかにし、その解決につながる具体的な対応策をまとめ、提案することを目的とした。そこで、特別支援学級等担当者のニーズに応えるために、手引書「特別支援学級スタート応援ブック」を作成し、内容は「学級経営編」「授業づくり編」「授業実践事例編」の3部構成とした。これらを活用することで、主に経験の少ない特別支援学級等担当者の授業力、学級経営力の向上を図りたいと考えた。

（1）主題設定の理由

平成19年度からの特別支援教育体制の中で、特別支援学級を取り巻く環境は、大きく変化してきている。特別支援学級に在籍する児童生徒数の増加や障害の重複化、多様化への対応、教育的ニーズへの対応、個別の教育支援計画の策定や個別の指導計画の作成、交流及び共同学習の推進、関係機関との連携などによって、特別支援学級の学習指導や学級経営の在り方にますます工夫が必要となってきた。また、特別支援学級は、学級内にとどまらない学校全体の支援体制への関わりが期待されており、校内での特別支援学級の果たす役割も大きくなってきている。

そのような中、近年、小・中学校の特別支援学級における課題として、「特別支援学級の増加や児童生徒の多様な教育的ニーズへの対応」及び「特別支援学級担任の専門性の向上」が挙げられている。この課題に対して、「障害特性や児童生徒の教育的ニーズに応じた指導・支援の充実を図る」とする施策の方向性が示されている。

中教審の「特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議審議経過報告」の資料「教員の特別支援教育に関する専門性の現状と課題について」（2010）では、特別支援学級等担当者に求められる専門性について、「特別支援教育全般に関する基礎的知識（制度的・社会的背景・動向等）」「障害種ごとの専門性として、担当する障害のある子どもの心理（発達を含む）や障害の生理・病理に関する一般的な知識・理解や教育課程、指導法に関する知識・理解及び実践的指導力」と整理している（※1）。また、研修に関しては、「特別支援学級担任について専門的な研修を受ける機会を増やすことが必要である。特に、特別支援学級担任の授業力、学級経営力を育成するため、教育委員会が中心となり、研究授業等を内容とする研修システムについて検討すべきである。」と示している（※1）。

※1 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会「特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議審議経過報告」（平成22年3月24日）

本県においても、平成24年度学校教育指導方針では、特別支援教育の充実に向けた具現

化のための取組として「特別支援学級・通級指導教室における指導の充実」を掲げ、特別支援教育の推進・充実のための様々な取組を進めている。また、本教育研修センターにおいても特別支援教育課の重点事項を「特別支援教育の専門性の向上」とし、特に、特別支援学級等担当者に対しては、児童生徒一人一人に応じた授業力の向上を目指し、業務を進めているところである。

しかし、本教育研修センターで実施している新任特別支援学級・通級指導教室担当者研修講座の受講者数を見ると、ここ数年は150人を超えており、新任や経験の少ない特別支援学級等担当者が多くなってきている。校内で相談できる人が少ない、指導内容や方法に不安がある、授業を見たくてもなかなか機会が得られない、児童生徒の指導について話合いや相談をしたり、専門的な助言を受けたりする機会が日常的に少ない等、戸惑いや不安を抱えながら、日々の指導に当たっている担当者が少なくないことが窺える。

そこで、まず、新任の特別支援学級等担当者の悩みや疑問、解決すべき課題を調査し、ニーズを把握する必要があると考えた。そして、そのニーズをもとに、主に経験の少ない特別支援学級等担当者が、学習指導や学級経営を進めていく際に、すぐにでも有効に活用できる資料を作成することで、特別支援学級等担当者の授業力、学級経営力の向上を図りたいと考えた。

(2) 研究の目的

本研究では、本県の現状を踏まえ、主に経験の少ない特別支援学級等担当者が抱える課題を調査し、ニーズを把握した上で、学習指導や学級経営を進めていく際に、参考資料として活用することができる手引書を作成することを目的とした。

図1は、本研究のイメージ図である。特別支援学級等担当者の学習指導や学級経営における課題を、質問紙調査で明らかにし、ニーズを把握する。そのニーズに基づいて、手引書を作成し、それらを活用してもらうことで、担当者の授業力や学級経営力の向上を図りたいと考えた。

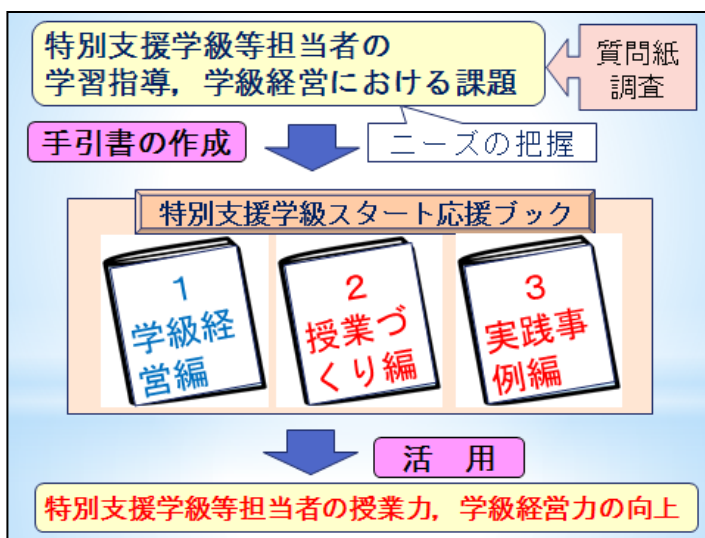


図1 研究のイメージ図

2 本県の特別支援学級の現状と課題

(1) 本県の現状

近年、全国的に少子化の傾向であるが、特別支援学級に在籍する児童生徒数は増加し、併せて特別支援学級の数も年々増えている。また、障害も多様化し、様々なニーズに対応していく特別支援学級への期待は、ますます高まってきている。

本県の特別支援学級に関する現状も全国的な傾向と同様である。

図2は、本県の特別支援学級の年度別在籍者数を示したものである。

小・中学校の特別支援学級に在籍する児童生徒が、年々増加していることが分かる。特に、小学校での増加が著しく、平成24年度(4,044人)は、平成16年度(2,070人)の約1.95倍となっており、小・中学校を合わせると、平成24年度(5,829人)は、平成16年度(3,059人)の約1.9倍となっている。

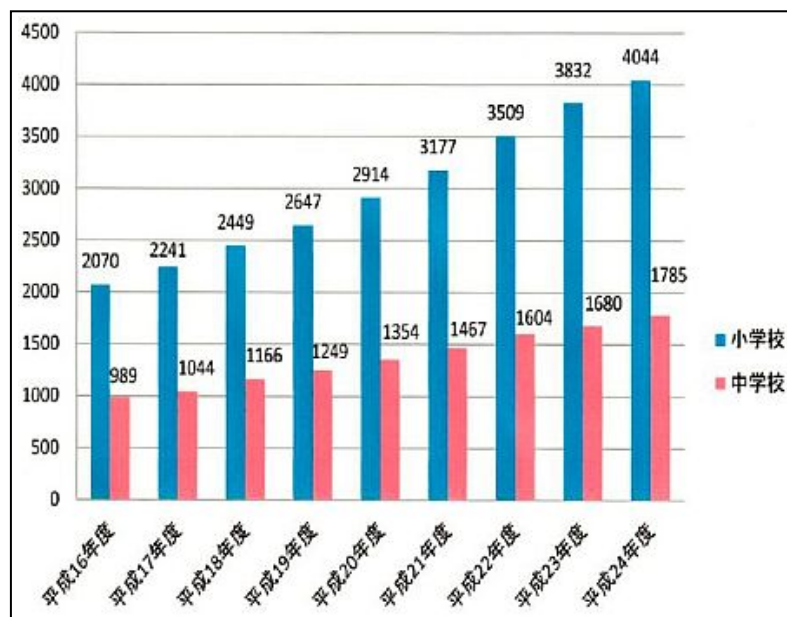


図2 特別支援学級の年度別在籍者数

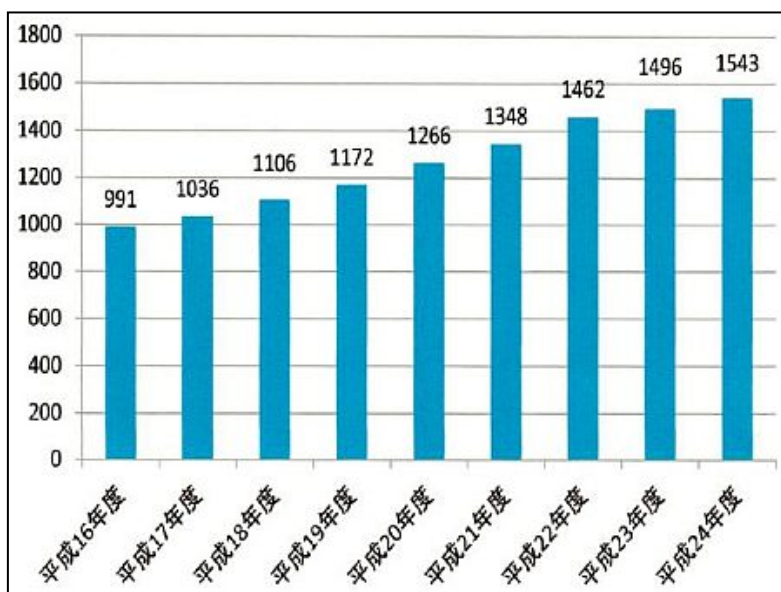


図3 特別支援学級・通級指導教室数

図3は、年度別に示した特別支援学級及び通級指導教室数である。図2の在籍者数の増加に伴い、こちらも年々増加している。

平成16年度の数は991、平成24年度の数は、1,543となっており、約1.6倍と500学級以上、増えていることが分かる。

在籍者数、学級数ともに、年々着実に増えてきている。

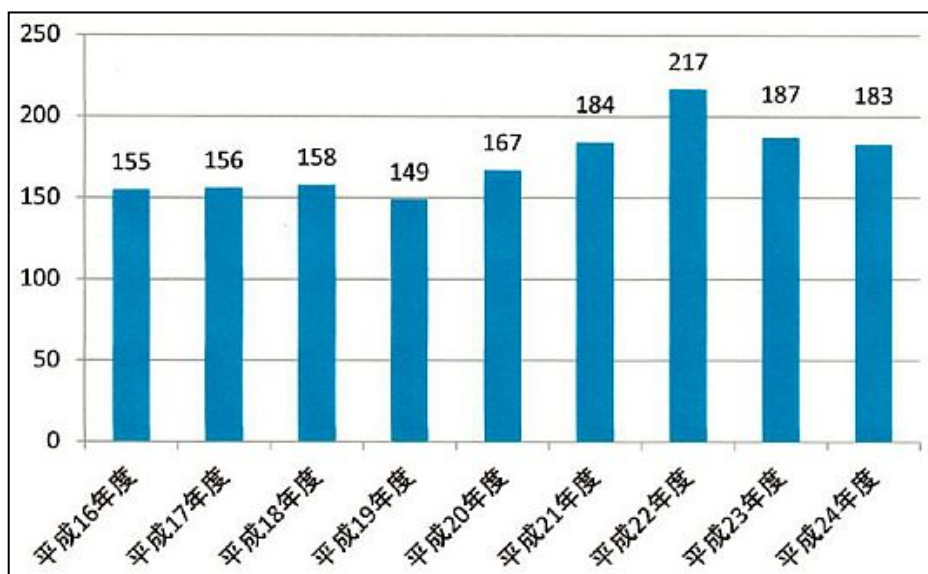


図4は、本教育研修センターで実施している新任特別支援学級・通級指導教室担当者研修講座の年度別受講者数を示したものである。毎年、ほぼ150人以上の受講者数となっており、平成22年度には、200人を越える受講者数であった。

図4 新任特別支援学級・通級指導教室担当者研修講座受講者

(2) 実態調査について

新任の特別支援学級等担当者の抱える課題を明らかにするために、実態調査を行った。対象は、本教育研修センターにおける「新任特別支援学級・通級指導教室担当者研修講座」の受講者で、小・中学校の特別支援学級、通級指導教室を初めて担当することになった先生方全員とした。

調査方法は、質問紙法とした。本研究は、2ヵ年計画であるので、平成23年度と平成24年度の受講者に対し、同様の調査を実施した。

(1) 調査対象及び調査実施日（人数は回収数）

	小学校	中学校	合計	調査実施日
平成23年度受講者	111人	71人	182人	平成23年6月7日
平成24年度受講者	113人	64人	177人	平成24年5月25日

※平成23, 24年度 新任特別支援学級・通級指導教室担当者 合計 359人

(2) 調査内容

<質問1>

特別支援学級または通級指導教室の担当になって、特に困っていることや不安に思うこと（下記の16項目から複数回答可）

1 時間割の作成	2 書類・帳簿の作成	3 教室環境づくり
4 実態把握, アセスメント	5 問題行動への対応	6 各計画の作成
7 領域・教科を合わせた指導	8 授業内容について	9 教材・教具づくり
10 指導案の書き方	11 学習評価 (通知表等)	12 保護者との連携
13 交流学級の担任との連携	14 全職員への理解	15 就学指導
16 福祉機関や進路について		

<質問2>

特別支援学級または通級指導教室を担当するに当たって困っていること

(次の19項目それぞれについて、「とても困っている」「困っている」「あまり困っていない」「困っていない」の4択で回答)

○学級経営・教育課程に関すること (4項目)

- ・教育課程の編成について
- ・教室環境について
- ・書類・帳簿等の学級事務について
- ・時間割の作成について

○児童生徒理解や学習指導に関すること (9項目)

- ・児童生徒の実態把握, 特性の理解に関すること
- ・個別の指導計画の作成について
- ・授業の具体的な指導目標の設定について
- ・各教科の指導内容・指導方法について
- ・教科等を合わせた指導 (生活単元学習・作業学習等) の指導内容・指導方法について
- ・自立活動の指導内容・指導方法について
- ・学習評価 (通知表・指導要録等)
- ・指導案の作成について
- ・児童生徒に合った教材・教具の準備について

○連携に関すること (4項目)

- ・保護者との連携について
- ・交流学級や支援員等との連携について
- ・校内支援体制や職員間の共通理解について
- ・各関係機関 (医療・福祉・労働・教育等) の情報について

○進路や就学指導に関すること (2項目)

- ・進路指導や就学指導のシステムの理解について
- ・外部関係機関 (医療機関・相談機関等) との連携について



(3) 調査結果

図5は、質問1の「特別支援学級または通級指導教室の担任になって、特に困っていることや不安に思うこと」について、16項目からあてはまるものを複数回答可で選択した結果である。

図中に赤枠で囲んだ3項目について、特に高い数値を示していた。一番困っていることは「7 領域・教科を合わせた指導（生活単元学習・作業学習等）や自立活動の授業の展開」であり、71.3%であった。次いで「6 各計画の作成（個別の指導計画、年間指導計画等）」が65.2%、「8 授業内容について」が63.5%であった。これまで経験したことがない特別支援学級ならではの授業（生活単元学習、自立活動、作業学習等）や個別の指導計画の作成等をどのように進めていけばよいか分からないという不安が大きいものとなっていることが分かった。

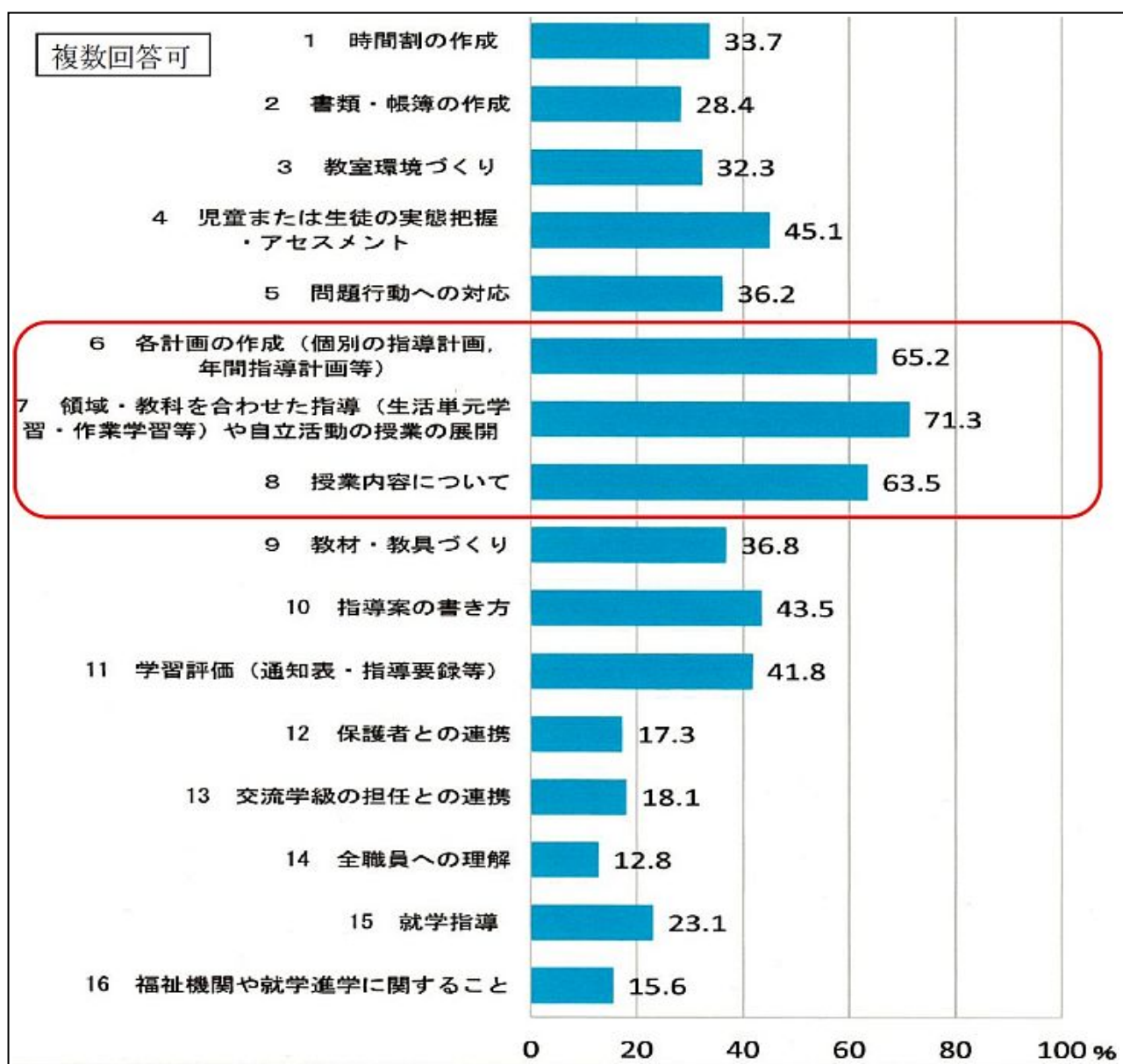


図5 特別支援学級等担当者になって、特に困っていることや不安に思うこと

(平成 23, 24 年度 新任特別支援学級・通級指導教室担当者 合計 359 人)

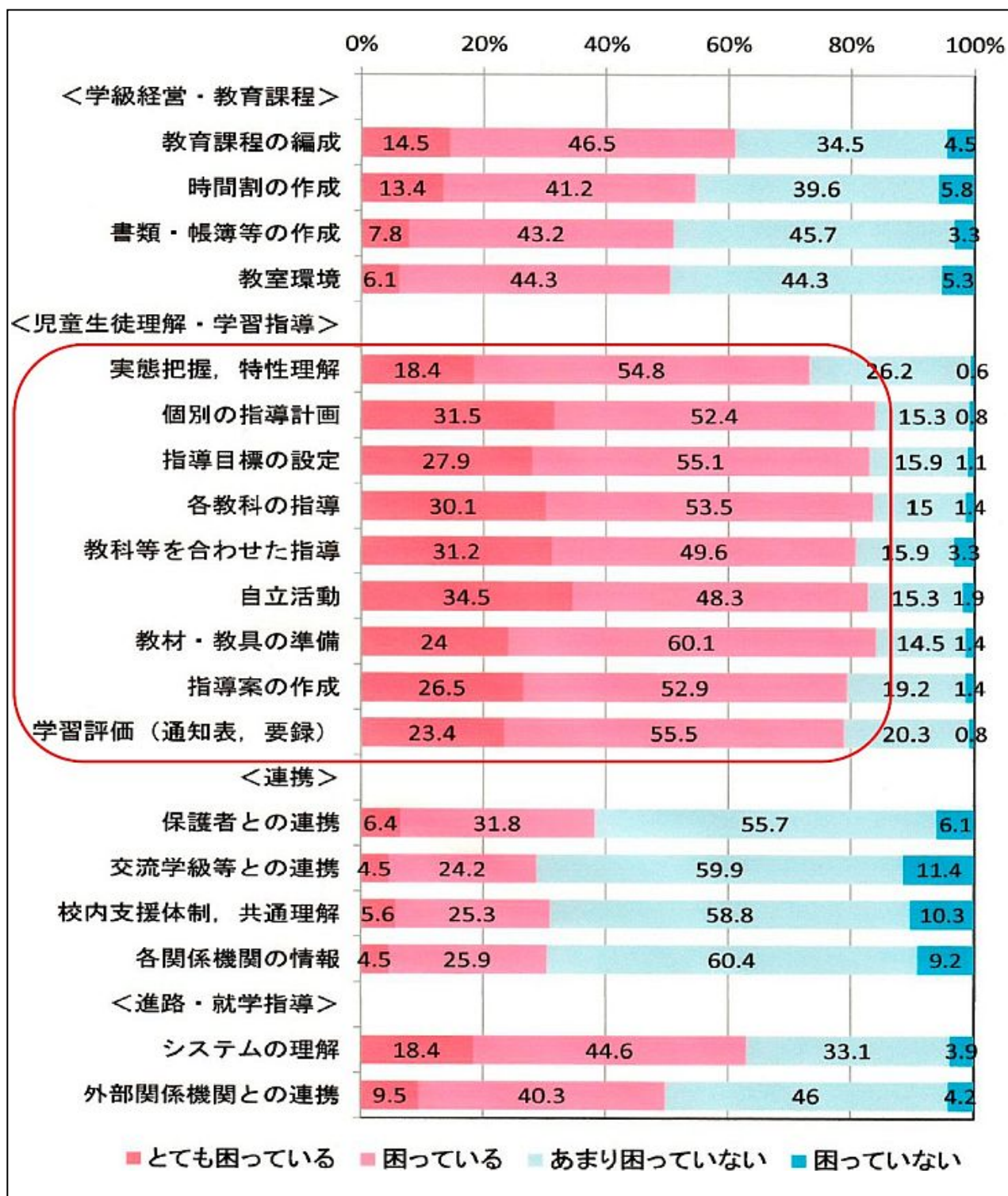


図6 特別支援学級等担当者になって、困っていること (N=359)

図6は、左側に示した19項目それぞれについて、「とても困っている」「困っている」「あまり困っていない」「困っていない」の4択で回答してもらった結果である。

「とても困っている」と「困っている」を合わせた割合をみると、赤枠で囲んだ<児童生徒理解・学習指導>に関する項目のほとんどで80%前後という高い数値となった。

次に、＜学級経営・教育課程＞と＜進路・就学指導＞の項目では、約半数が「困っている」と回答していた。

(4) 考察

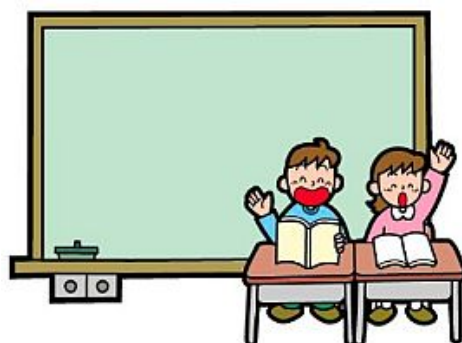
実態調査(質問紙調査)から、新任の特別支援学級等担当者が、日頃どのようなことに困り、不安を感じているかについて、把握することができた。

図7は、新任の特別支援学級等担当者が、特に困っていると感じている点について、まとめたものである。

このことから、新任の特別支援学級等担当者が抱えている主な課題は、児童生徒の実態把握、日々の授業づくり、個別の指導計画や学習指導案、通知表等の作成であることが分かった。



図7 新任の特別支援学級等担当者が特に困っていること



3 「特別支援学級スタート応援ブック」について

前章で明らかになった質問紙調査の結果を踏まえ、新任の特別支援学級等担当者のニーズに応じることができるように検討を重ね、手引書となる資料を作成した。

名称を「特別支援学級スタート応援ブック」（以下「応援ブック」）とし、「学級経営編」「授業づくり編」「授業実践事例編」の3部構成とした（図1参照）。

作成にあたっては、次の点に留意した。

- ・様々な文献・資料を参考にし、特別支援学級等担当者のニーズに合った内容とする。
- ・これまで本教育研修センターで作成した資料等を生かしながら再編集する。
- ・スーパーバイザー（大学教授）や研究協力員との連携を図りながら、内容について検討する。
- ・本教育研修センターホームページよりダウンロードできるようにする。
- ・次年度以降の研修講座において、テキストとして使用できるようにする。

「応援ブック」の中には、右のようなキャラクターが登場する。困ったことや分からないことがあったら、この「応援ブック」を読んで納得してほしい、茨城名産の納豆のように粘り強く児童生徒を支援してほしいという願いを込めて

「読んで なっとくん」

と名付けた。



図8 特別支援学級を応援するキャラクター

特別支援学級を応援するキャラクターとして「応援ブック」のあちらこちらに登場して、ポイントとなる事柄について解説をしている。

（1）「特別支援学級スタート応援ブック」【学級経営編】について

「学級経営編」では、特別支援学級を経営していく上での基本的事項についてまとめた。4月、児童生徒を迎えるにあたって、何を準備しておけばよいのか、時間割はどうやって作成すればよいのか、個別の指導計画はどのように作成するのかなど、分からないことばかりで不安となる。困ったときにすぐに活用できる具体的な項目について、4月からやるべきことを順に確認できるように時系列でまとめてある。必ずしもその月にとということではないが、この時期にはこんなことを行うという大まかな目安になると思われる。

最後には、「資料編」として、各種制度やサービス、専門機関の情報、特別支援教育に関

する基礎的な用語等について掲載した。特別支援学級等担当者として、知っておきたい事柄が多くあるので、その都度、確認しておくといよい。

「学級経営編」の内容構成については、次の表1に示すとおりである。次ページの図9は「学級経営編」から「7年間指導計画」の一部、図10は、「個別の指導計画の例」を示した。

表1 応援ブック【学級経営編】の構成

章	項目（内容）
1 4月に取り組むこと	(1) 始業日までの準備 (2) 始業式・入学式での配慮 (3) 教室環境の整備 (4) 4月第1週の活動 (5) 教育課程の編成 (6) 学級経営案の作成 (7) 年間指導計画の作成 (8) 週時程表（時間割）の作成 (9) 学級通信の発行
2 5～7月に取り組むこと	(1) 実態把握 (2) 個別の指導計画の作成 (3) 通知表の作成 (4) 教材・教具の作成や活用 (5) 共通理解
3 夏休み以降に取り組むこと	(1) 進路指導 (2) 就学相談 (3) 行事への参加の仕方
4 1～3月（年度末）までに 取り組むこと	(1) 指導のまとめ (2) 指導要録 (3) 引き継ぎの準備
【資料編】	1 各種制度・福祉サービスについて 2 主な専門機関等 (1) 教育 (2) 福祉 (3) 医療 3 用語集



7 年間指導計画の作成

年間を通して、学級でどんな指導をしていくのかを明確にした具体的な計画です。作成に当たっては、児童生徒の実態に即して、教育目標の達成に適した指導の形態を工夫し、小学校、中学校及び盲・聾・特別支援学校の小学部・中学部学習指導要領の教育内容を参考に、具体的な指導内容を考えていきます。

1 作成のポイント

- 一人一人の障害の状態や発達段階、特性を十分に把握し、実態に応じた計画を立てましょう。
- 学校・学年・学級の行事等を考慮し、計画を立てましょう。
- 指導方法や指導形態等を考えながら計画を立てましょう。
- 「教科別・領域別の指導」と「各教科等を合わせた指導」のバランスを考え、関連を図りながら計画を立てましょう。
- 教科・領域ごとの系統性や順序性を考慮しましょう。
- 他校の計画等も参考にしてみましょう。

年間指導計画を作成する際のポイント、個別の指導計画との関連等について、解説をしています。この次のページからは各障害種別の年間指導計画の例を紹介していますので、参考にしてください。

2 個別の指導計画

年間指導計画は、年度当初に立て、児童生徒の成長に合わせていくことが大切です。特に「個別の指導計画」は、学習活動を工夫し、児童生徒が具体的な生活習慣を身につけたりできるように配慮します。

3 「道徳」、「自立活動」

「道徳」については、知的障害特別支援学級の児童生徒の望ましいですが、実際の指導では「各教科等を」

「自立活動」は、児童生徒の実態に応じて、

図9 「年間指導計画の作成」より

個別の指導計画の例

今年度の目標（長期目標）		主な指導の場	② 目標設定 （長期目標）
学習面	<ul style="list-style-type: none"> ○学習上の成功体験を積み重ねることで学習に対する自信を高めることができる。 ○整数の四則演算を確実に行うことができる。 ○学習した漢字を作文の中で使うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○特別支援学級、交流学級 ○特別支援学級 ○特別支援学級 	・1年後の児童生徒の姿を想像して…
生活面	<ul style="list-style-type: none"> ○学習に必要なものを忘れずに持ってくるができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○特別支援学級、家庭 	
対人関係面	<ul style="list-style-type: none"> ○集団の中でも先生の指示を聞き漏らさないで、行動することができる。 ○分からないことや困ったことがあった時は、自分から友達や先生に支援を求めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○交流学級、特別支援学級 ○特別支援学級、交流学級 	特別支援学級、通常の学級、家庭など、目標達成のための指導を主にどこで行うかを記入する欄です。一つの目標に対し複数の場で指導できると効果的です。
(1) 学期の取り組み			
指導目標		具体的手立て	
学習面・生活面	<ul style="list-style-type: none"> ○すべての段のかけ算九九を×1から順番に確実に唱えることができる。 ○「書き」漢字テストで平均10問中7問正答することができる。 ○辞書を引ながら学習した漢字を作文の中で使うことができる。(8割) ○先生が黒板に書いた連絡帳内容を、確実に連絡帳に写すことができる。 ○毎日必ず連絡帳を保護者と一緒に確認し、次の日の準備をすることができる。 ○朝の会や帰りの会の「先生の話」の内容を、半分以上を覚えておくことができる。 ○支援学級の学習の中で、自力で解けない問題に出会った時、解き方を友達に尋ねることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・携帯端末でかけ算九九を自分で書いて戸付き動画を見ながら、九九を唱える練習をする。 ・書き順を言語化し（よこーたてーよこーのよ）のように、唱えながら漢字学習を行う。 ・どんなに短い文章を書く際にも辞書を引いておくようにする。作文も十分時間を確保する。 ・連絡帳を書く時間を決めるとともに、日に付や持ち物を書く欄を予め記入しておく。 ・保護者と一緒に準備ができたときには、A男をおおいで賞賛する。 ・話すことがらを板書するとともに、簡潔に話すよう心がける。(交流学級で) ・「先生の話チェック！」の場を設け、話の内容を確認する。(支援学級で) ・話しかけやすい友達と席を隣同士にする。 ・全体に向けて友達と協力し合って課題解決することを推奨する。 	
指導の評価（変容と課題・手立ての有効性）		来学期の指導の方向性	
<ul style="list-style-type: none"> ○九九は確実に習得できた。 ○漢字テスト「書き」平均5割。作文中では辞書を引ながら漢字を使って書くという意識が育ってきた。 ○忘れ物は半分程度に減ってきた。 ○集団の中でも集中して話を聞いている様子が見られるようになった。また、自分から友達に関わろうとする姿も見られるようになった。 		<ul style="list-style-type: none"> ○割り算、×2けたのかけ算の学習に進む。 ○何も見ないで漢字を書くことにこだわらない指導も視野に入れつつ継続する。 ○継続して取り組む。 ○継続して取り組む。また集団の中で友達の話聞くことにも意識が向けられるような指導も行う。 	
② 目標設定（短期目標）		③ 具体的な手立て	
<ul style="list-style-type: none"> ・できた、できないで評価できる具体的な目に見える行動目標に ・長期目標をふまえて… 		<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の得意なことを生かし、苦手なことをカバーできるものを ・環境調整も 	
⑤ 総合評価			
<ul style="list-style-type: none"> ・目標の達成状況や、手立ての有効性などを評価 ・複数の教師の意見も取り入れて ・来期の個別の指導計画の資料として活用 			

個別の指導計画の例を示しました。初めて作成する場合は、戸惑うことも多いと思います。各欄には、どのようなことを記入するかについて解説しました。

図10 「個別の指導計画の例」より

(2) 「特別支援学級スタート応援ブック」【授業づくり編】について

「授業づくり編」の第1章では、教育課程や日常生活の指導、生活単元学習といった各指導に関する基本的な考え方や配慮点についてまとめた。第2章では、授業づくりを進めていく際に大切にしたいポイントを「8つの視点」として示し、分かりやすく解説した。第3章では、学習指導案を作成する際に配慮したい点について、書式を示しながらまとめた。

本研究においては、先の質問紙調査でのニーズに応じて「授業づくり編」を充実させたことが大きな特徴で、経験の少ない担当者だけでなく、経験豊富な担当者においても十分活用できるものとなっている。「授業づくり編」の内容構成は、次の表2に示すとおりである。

表2 応援ブック【授業づくり編】の構成

章	項目 (内容)
1 教育課程について	(1) 日常生活の指導 (2) 生活単元学習 (3) 作業学習 (4) 自立活動 (5) 教科別の指導について (6) 領域別の指導・総合的な学習の時間 (7) 交流及び共同学習
2 特別支援学級等の授業づくり ＜授業づくりの8つの視点＞	(1) 実態把握、目標設定の工夫 (2) 場の工夫 (3) 導入・展開・まとめの工夫及び単元計画 (4) 発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫 (5) 特性に応じた支援 (6) 教材・教具の工夫 (7) ティーム・ティーチング (8) 評価の工夫
3 指導案作成にあたって	(1) 教科(国語・算数等) (2) 自立活動 (3) 自立活動を加味した教科別の指導及び教科等を合わせた指導 (4) 生活単元学習

一日の学校生活において、中心となるものは、授業であり、1年間に児童生徒は1,000時間あまりの授業を受けている。その授業を児童生徒にとって、分かりやすいものにしていくことは、彼らの将来の自立と社会参加の基盤を養ううえで大切なものであり、私たち教員の力量が問われる。

それでは、第2章に示した「特別支援学級等の授業づくり」について、授業づくりの手順(図11参照)と「授業づくりの8つの視点」について述べる。

【授業づくりの手順】

：授業づくりの8つの視点

① 児童生徒の実態把握を的確にする

※単元・題材に関する実態も的確に把握する。



② 指導の目標・ねらいを明確にする

※年間指導計画，学習指導要領等から指導目標（単元目標）やこの単元で何をねらうのかを明確にする。



③ 妥当性のある目標・ねらいを考える

※児童生徒のこれまでの経験や実態に合っているかを考える。



④ ニーズに合った内容を考える

※指導内容を工夫する。児童生徒の発達段階や障害の特性に合わせて考える。
☆「個別の指導計画」との関連を考慮する。



⑤ 順序性のある指導計画を考える

※児童生徒の目標達成の度合いを予測し，それを順序立てて指導計画を立てる。導入，展開，まとめを工夫する。



⑥ グループ編成は適切か考える
<全体，グループ，個別>

※集団化と個別化の工夫をする。発達段階や目標との関連で工夫する。
チーム・ティーチングの良さを活かす。
☆複数の教員で指導に当たる場合



⑦ 学習環境や場の設定は適切かどうかを考える

※意欲を高めるような場の設定を行う。板書における工夫も考えたい。



⑧ 授業の効果を高める教材・教具の工夫をする

※目標を達成できるために，発達段階にそった効果的な教材・教具の工夫をする。



⑨ 教員の役割分担を明確にする

※授業づくりの段階で共通理解を図り，役割分担を明確にする。



⑩ 児童生徒の反応を予想する

※実態の分析から，児童生徒の動きや反応の様子を予想し，指示や発問の内容，賞賛の仕方などを工夫する。



⑪ 評価方法について明確にする

※児童生徒の反応や変容を客観的に見取り評価するとともに教師自身の指導についても評価し，次時の授業改善につなげる。

実態把握，目標設定の工夫

特性に応じた支援

導入・展開・まとめの工夫，単元計画

場の工夫

教材・教具の工夫

チーム・ティーチング

発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫

評価の工夫

図 11 授業づくりの手順

このような授業づくりの手順を踏まえ、児童生徒にとって分かりやすく、達成感を得られ、さらに意欲と自信を高められるような授業を実践していくことが求められる。そのためには、多くの配慮すべき事項が挙げられる。「何をどう計画し準備していけばいいのかわからない」という声もよく聞かれるところであるが、ここでは、多くの配慮点の中から、授業づくりで大切にしたい視点として8つを示し（□ 授業づくりの8つの視点）、焦点化することで、授業づくりをより効果的に進めていけるようにした。

この授業づくりの8つの視点については、便宜上、番号をつけたが、特に順序性があるわけではなく、それぞれが密接に関連しているものである（図12参照）。ここに示した8つの視点について、目の前の児童生徒を想定しながら、授業を計画し、準備していくことで、よりよい授業が実践されると考える。ただ、すべての視点について毎回周到に準備を進め授業を行っていくことは難しいと思われる。今回の授業ではこの視点、次の授業ではこの視点というように、まずは1つからでも工夫をして実践していくという日々の積み重ねが、授業力の向上につながっていくと考える。

 詳しくは、応援ブック【授業づくり編】を参照

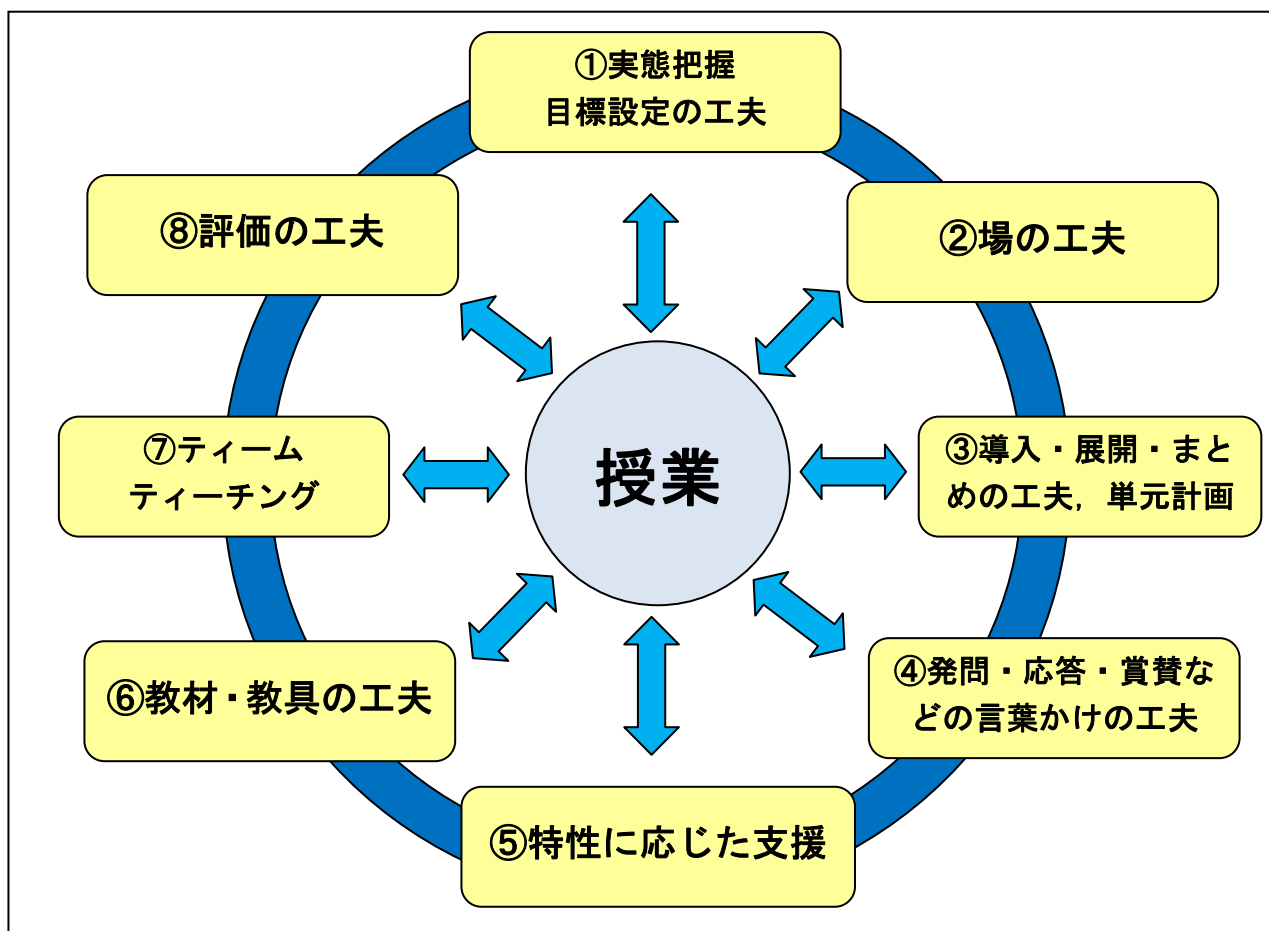


図12 授業づくりの8つの視点

①実態把握，目標設定の工夫

児童生徒の障害の状態は，一人一人異なっているので，必然的に指導内容や指導方法も一人一人に合わせていくことになる。そのため，的確な実態把握が求められる。授業づくりを進めていく上で，的確な実態把握を踏まえた目標設定が一番重要であるといえる。まずは，様々な情報を収集し，生活面，学習面，行動面，家庭環境や生育歴等，児童生徒の全体像を把握しておくことが大切である。

【実態把握】

- ① 指導に役立つ実態把握 → 実態把握を指導に生かす
- ② 「できるところ」「もう少しでできそうなところ」の発見
→ 「できない」ところをみない
- ③ 柔軟な目で児童生徒をみる → 思い込みにならない，複数の目でみる
- ④ 常に児童生徒と関わりながら観察
→ 児童生徒の様子は場面によって日々変化する
- ⑤ 現象面のみに目を奪われず，行動の背景理解を → 表れる行動は氷山の一角
- ⑥ 検査，調査，観察は理解のための一つの資料 → 全体像，臨床像を見失わない
- ⑦ 複数の教員の目で → 自分だけの見方にならない
- ⑧ 一時期の検査，調査，観察で実態把握を終わらせない
→ 児童生徒は日々成長する



そして，さらに工夫したい点は，これから実施しようとする授業内容に関する実態についてもできるだけ丁寧に把握しておくことである。このことが的確な目標設定と指導の手立てにつながっていく。

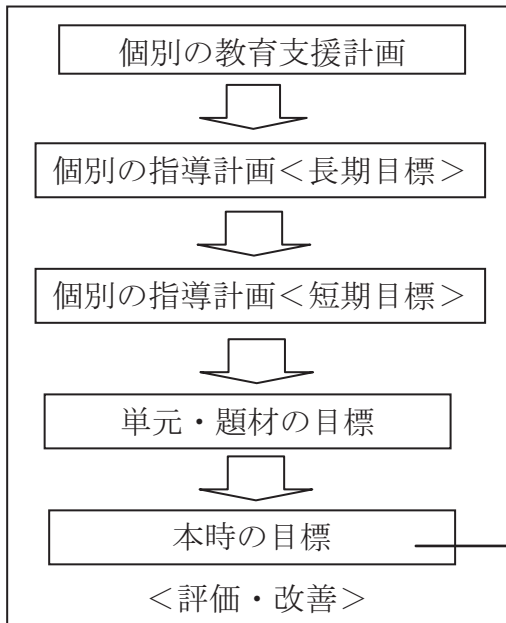
※例えば，算数・数学等で，「買い物学習」の単元を実施する場合，

- 買い物の経験はどの程度あり，どのように行っているのか
- 金銭（紙幣，硬貨，おつり，価値・・・）に関する理解はどの程度なのか
- 必要な額を出せるのか，おつりをもらうこと意識はもっているのか
- 計算力はどの程度なのか
- 決められた金額内で選べるのか・・・ など

【目標設定の工夫】

長期目標を短期間（学期，前後期等）に達成することが可能な短期目標におろす。さらに，単元（題材），そして本時の指導において達成可能なものに細分していく。本時の目標については，基本的に，その時間に達成すべきものなので，次時も同じ目標にならないようにしたいものである。達成できないということは，目標が高すぎた，あるいは手立てを含め指導が適切でなかったということになる。

徐々に具体的・客観的な目標におろす



<このような方法でおろしていく>

[ポイント①] 場面を限定する。

運動 → 体育の時間 → マット運動 → 前転で

[ポイント②] 活動を具体的なものにする。

課題 → ○○の授業 → ○○のプリント → 1番

[ポイント③] 時間や回数等, 数値化する。

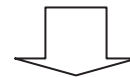
集中して → 授業時間 → 20分間 → 10回

[ポイント④] 支援の程度(条件)を示す。

○○の支援を受けて, ○○の場面で~ができる。

※その支援の程度をより間接的なものにする

その時間(45分)に達成可能な目標



かなり具体的な目標でなければならない

特に本時の目標については、評価可能な具体的・客観的な内容で文章化することがポイントです。目標を高く設定しすぎてしまうことにも気をつけましょう。



～目標設定のコツ～

- ① スモールステップでたてる
- ② 児童生徒主体の目標である
- ③ 肯定的な目標である
- ④ ひとつの目標は、ひとつの要素にしばられている
- ⑤ 観察や評価が可能(○×)な目標である
- ⑥ 条件や基準が示されている
- ⑦ 児童生徒の強い力、得意な面を利用できる
- ⑧ 手立ての量が適切である

行動の用語を使うことで、具体的でわかりやすく評価がしやすくなる。

<行動の用語>

観察可能, 測定可能なもの(数えられる), 誰が測定しても同じ結果が出るようなもの

- ：「すわる，歩く，指さす，言う」などは行動の用語，誰が見ても評価しやすい
 ×：「わかる，理解する，聴く，知る」などは行動の用語ではない

＜表記上，注意したい点（例）＞

×：きちんと，しっかり，丁寧に～することができる。

→ 手順表のとおり，手本と同じように，印と印を合わせて・・・

×：考えることができる，理解することができる。

→ ワークシートに記入することができる，意見を発表することができる・・・

※理解した結果，何ができればよいかを記入する

×：友達を叩かない，教室から出て行かない，授業中は静かにする・・・

→ 何をすればいいかがわかる行動目標へ

～どの程度できたか～

可能であれば，回数や時間，距離など数値化できるとよい。

- ・ 5回中3回できる
- ・ 20分間続けて行う
- ・ 10メートル運ぶことができる
- ・ 2分以内でできる など

具体的に記述すると，どの教員がみても確かな評価ができ，次の目標も立てやすくなる。

＜例＞本時の目標 「落ち着いて課題に取り組むことができる」

このような目標を立ててしまうことがよくありますね。

「落ち着いて」とは，どのような状態をいうのでしょうか？

「落ち着いて」の評価基準が曖昧なため，教員の主観による評価が中心となったり，教員間の評価がズレてしまったりするため，適切な評価にならず次の目標設定も難しくなります。例えば・・・

- ・ 「20分間着席してプリントに取り組むことができる」
- ・ 「課題に10問取り組み，7問正解することができる」
- ・ 「手順表を見て，最後まで一人で作成することができる」・・・

このように目標設定を工夫すると確かな評価ができ，次の目標設定に確実に繋がっていきます。



②場の工夫

児童生徒の学習意欲を高め、目標に迫るためには、指導内容や一人一人の実態に応じた場の工夫が大切である。同じ活動であっても、ちょっとした場の工夫をすることで、児童生徒はもてる力を十分発揮し、意欲的に集中して取り組むことができる。児童生徒が安心感を持ち、楽しく学習できる場を工夫したい。

○人的環境を整える

通常の学級のような大きな集団の中では、緊張感や不安感から自分をうまく表現できないことがある。安心して学習に取り組むために、まずは教員との一対一の個別の学習から始め、徐々にペアやグループなどの小集団にしていくこともよい。ただし、個々の発達段階の違いや児童生徒同士の相性もあるので、小集団の編成の際には配慮が必要である。

○物的環境を整える

授業に意欲的に参加したり、目的とする活動に集中して取り組んだりすることができるようにするためにも、物的環境を整えることが必要である。例えば、算数・数学等では、「買い物学習」でお店を設定し、代金の計算をすることや、「数」の学習でボウリング場を設定し、倒したピンの数の計算をする活動など、楽しくできるように工夫したい。児童生徒の趣味や好きなキャラクター等を利用した場の設定も効果的である。

また、集中の妨げになる掲示物や備品等は、精選したり、カバーやカーテンで見えないようにしたりして、視覚的な刺激を減らす工夫や音（聴覚的な刺激）に対する配慮も必要である。



カーテンの利用



パーテーションの利用

○活動場所を変化させる

同じ教室内でも、いくつかのスペースに分けること（パーテーションの利用）で、場所に応じた活動を決める（場の構造化）とよい。（例えば、各自の机のスペース→学習、大きめのテーブルのスペース→作業（製作活動）、カーペットのスペース→ゲームや遊び、ソファのスペース→読書等）

また、パソコン室や調理室等、特別教室の利用も効果的である。

③導入・展開・まとめの工夫，単元計画

1時間の授業を計画する際に，導入・展開・まとめの一連の流れを工夫することは，活動への意欲づけや集中力の持続，学習目標の達成のために，重要なポイントになる。45分（50分）の時間を児童生徒の実態を踏まえながらどう指導していくか，順序立てて考えておくことが大切である。

【導入の工夫】※視覚的な情報（板書や掲示）と聴覚的な情報（言葉での説明）の工夫

- 見通しがもてる・・・その時間の授業で何をするのか
- 目標がわかる・・・その時間の自分の目標は何なのか
- 意欲が高まる・・・その時間の活動への意欲を引き出す



【展開の工夫】

個に応じた指導をするためには，児童生徒一人一人の実態把握をもとに，授業の目標達成のための活動内容と方法「どんな場で，どんな教材・教具を活用して，どんな支援で」を工夫することが必要である。児童生徒の実態から，集中できる時間にも配慮して，動きのある活動も取り入れるとよい。

【まとめの工夫】

それぞれの活動の振り返りをする時間である。児童生徒の学習の評価，教員の指導内容・方法の評価を確認する場であり，8つの視点の「評価の工夫」と関連している。

児童生徒には導入で確認したそれぞれの目標が，自分なりにどう達成できたかを表現（発表やワークシートに記入）できるように工夫したい。それに対して教員は児童生徒の活動に対してのフィードバック（できたこと，良かったことを言語化して伝える）をし，大いに賞賛することが必要である。児童生徒は達成感を感じ，自信をもって次の授業にチャレンジしていく。授業の展開部で時間がかかり，まとめの時間を省略あるいは簡略してしまうことがよくあるので，気をつけたい。

単元（題材）ごとに，**導入→展開→まとめ**をパターン化してみるとよい。児童生徒は活動への見通しをよりもちやすくなる。

（例）**導入（活動内容・目標の確認・読み聞かせ）**

→ **展開（メインの活動）** → **まとめ（振り返り，自由遊び）**



【単元計画】

1時間ごとの授業の計画を進める上で，そのもとになる単元計画の工夫が重要になる。単元によって，全指導時間に違いが出るのは当然であるが，1時間のみではなく，複数の指導時間で計画し，単元全体の流れも導入・展開・まとめの流れになるように工夫したい。生活単元学習であれば，各教科等の内容の扱いや各行事との関連も明確にしておくことが大切である。

④発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫


学習活動や日常生活において、失敗の経験が多くなっている児童生徒の中には、自己肯定感の低下が見られることがある。適切な発問、応答、賞賛は、本人に自信をもたせ、自己肯定感を高めるなどの効果が期待できる。答えやすいような発問をしたり、答えや活動に対して言葉やうなずき等で応答したりすることで、児童生徒の学習や活動の意欲を高めることができる。また、児童生徒は、賞賛を多く受けることで、安心して活動に取り組み、持続力も高まると思われる。児童生徒が積極的に学習や活動に参加できる言葉かけの工夫をしていきたい。

【発問の工夫】

○発問の役割

発問には、児童生徒の思考を深める役割とともに、次の役割がある。

- ・指示…児童生徒の活動を促す
- ・説明…児童生徒の理解を助ける
- ・助言…児童生徒のつまずきを解消する
- ・評価…児童生徒の意欲を高める



これらをバランスよく、効果的なタイミングで使いましょう。授業のどこでどの発問を使うのか、十分教材研究をして発問計画を立てましょう。

○発問や指示のポイント

聞いて理解することが苦手な児童生徒は、発問の意味や指示の内容を理解することが難しい場合がある。発問や指示をより具体的に分かりやすく伝えることが大切である。

(例) 選択肢を用いた発問	「AとBのどちらですか？」
尊重する発問	「〇〇さん、知っていたら教えてくれる？」
具体的な指示	「線の上をはさみで切りましょう」 「左手で紙を押さえましょう」
予告する	「あと10分で始めるよ」「あと〇回で、おしまい」
尊重する指示	「～をお願いね」「〇〇さんの出番ですよ」

【応答の工夫】

授業は教員の働きかけから始まる。その働きかけに対して、児童生徒が反応をして初めて授業が動き出す。児童生徒の思いを受け止め、肯定的に応答することで、学習や活動の意欲を高めることができる。

○応答のポイント

活動に飽きてしまったり、興味のあるものに気持ちがそがれて離席してしまったりする児童生徒には、「だめ！」などの禁止用語を使わずに、「～しようね」と肯定的に伝える。

(例) 受容する	「なるほど」「いい考えだね」「よく気がついたね」
気持ちに共感する	「そう、～なの」「～したかったのね」 「～と思ったんだよね」
優先順位を伝える	「～の続きができたなら、やってみようか」 「1番目は～，2番目は～」
理由を伝える	「～だから～しようね」
見通しをもたせる	「～できたら，おしまいにするよ」 「あと2問で合格！」

【賞賛の工夫】

賞賛することは，児童生徒の・・・

自己肯定感 (私はこれでいいんだ)

自信 (私はできる！もっとがんばるぞ！)

信頼感 (私を認めてくれたこの先生，好きだなあ)

} を育てる。

○賞賛のポイント

- ・よかった行動を具体的にほめる。
- ・何がよかったか，具体的に伝える。
- ・よいところを見つけたら，その時にほめる。
- ・心をこめてほめる。
- ・児童生徒の発達段階に応じたほめ方を工夫する。

みんなの前で大げさにほめるよりも，サインやアイコンタクト等，そばでさりげなく伝える方が有効な場合もあります。



(例) ほめる	・行動のはじまり 「〇〇さんは，もう気づいたね」 「準備が早いね」
	・途中経過 「いいね」「がんばっているね」 「どんだんうまくなっているね」
	・達成時 「できたね」「〇〇がすごいね！」「花丸！」 「〇〇さんの発表，～がよかったよ」
認める	「順番を守れてえらいね」「待つことができたね」「その調子！」
喜ぶ	「～ができてよかったね。先生もうれしいな」
感謝する	「〇〇さんのアイデア，最高だね！ありがとう」 「進んで片付けをしてくれて，助かるなあ」

⑤特性に応じた支援

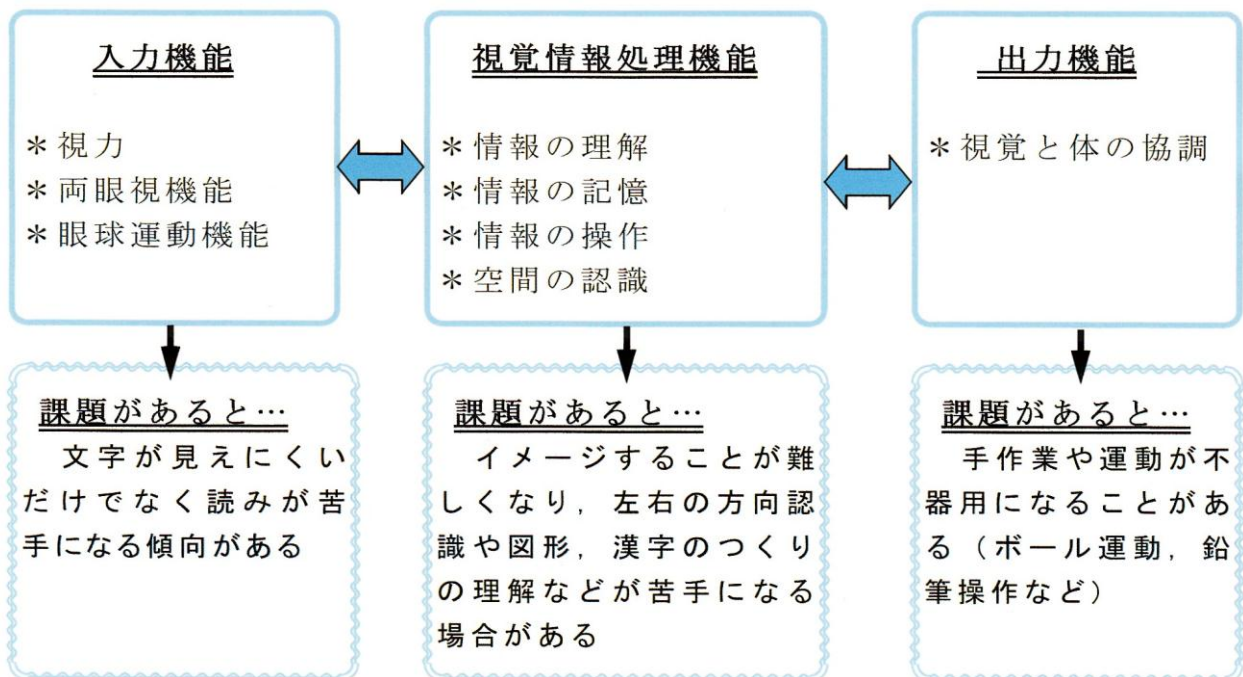
特別な配慮を必要とする児童生徒は「単に学習が遅れている」「本人の努力不足」「わざと課題や活動に取り組むことを怠けている」「自分勝手なことをしている」と見られてしまうことがある。これらの状態は、児童生徒の特性に起因していることがあり、その特性に応じた指導及び支援が必要である。



○見ること（視機能）・聞くこと（聴覚）と学習

【見ること（視機能）】

視機能とは、目で見えたものを理解し、適切な行動をとるためのいろいろな働きで、視力もその一つである。視機能は大きく3つの機能に分けられる。



【聞くこと（聴覚）】

聴覚とは、ただ音が聞こえるということではなく、どのように聞こえるか、どのように聞き取れるかが重要になってくる。様々な生活音の中から、今の自分に必要な音を聞き分けることが苦手な児童生徒は、学習面でも困難が生じることがある。



授業中、教員の声よりも周囲の児童生徒の声や机・椅子のきしむ音などに気をとられてしまうと授業の内容に集中しにくくなる。また、声の高低で聞き取りに違いが見られる児童生徒もいる。

本人ががんばって勉強しても、なかなか成果が見られない場合、聞こえ方の視点ももつことが必要である。聞こえ方に対する周囲の理解と配慮で改善されることがある。

○認知処理スタイルについて

障害の有無にかかわらず、全ての児童生徒にとってそれぞれ自分に学びやすい学習のスタイルがある。認知処理スタイルと呼ばれることもあるが、視覚的な情報を活用することが得意で、物事の全体像を捉えてから学習するタイプ（視覚優位，同時処理），聴覚的な情報を活用することが得意で，時系列的に順番に学習するタイプ（聴覚優位，継次処理）などがあげられる。

視覚優位，同時処理型指導の方法



◆全体をふまえた教え方

指導のねらいの本質的な部分を含んでいるような課題を最初から提示する指導方法

◆全体から部分へ

複数の刺激を1つのかたまりとして最初から一度に提示し，刺激全体を捉えさせてから細部へ移行させていく指導方法

◆関連性の重視

提示された複数の刺激間の関連性に注目させる指導方法

◆視覚的・運動的の手がかり

視覚的・運動的の手がかりを用いて課題解決を図る指導方法

◆空間的・統合的

空間的な手がかりを用いたり，統合的な手法で課題解決を図る指導方法

視覚的な支援は，授業を進めていく上でたいへん有効な支援方法です。しかし，場合によっては，視覚的な支援のための教材や板書，掲示物などが，集中を妨げてしまう原因にもなります。児童生徒の実態をよく把握し，より効果的な使い方を工夫しましょう。視覚情報が多すぎるのは禁物です。



聴覚優位，継次処理型指導の方法



◆段階的な教え方

いくつかの指導ステップを経て，指導のねらいに到達するような段階的な指導方法

◆部分から全体へ

注目させるべき刺激を，最初は部分的に提示し，徐々に全体へ広げていく指導方法

◆順序性の重視

番号等を用いながら，課題解決への順序性を重視した指導方法

◆聴覚的・言語的の手がかり

聴覚的・言語的な手がかりを用いて課題解決を図る指導方法

◆時間的・分析的

時間的な手がかりや分析的な手法を用いて課題解決を図る指導方法

⑥教材・教具の工夫

児童生徒が自主的・主体的に学習を進め、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるようにするために、教材・教具を適切に活用することが大切である。活動の場、かかわる人、活用する用具等のすべてが教材・教具といえる。よい教材・教具は、児童生徒をよく知る（実態把握）ことからスタートする。ちょっとした工夫が目標達成に大きくつながるので、十分検討し、児童生徒に合うものを用意していきたい。

【教材・教具の役割】



○自発的な行動の促し

児童生徒の興味・関心を引く教材・教具は、児童生徒の自発的行動を引き出す。

○学習への動機づけ

学習のきっかけを作り、取りかかりの動機づけとなる。

○系統的な学習の展開

児童生徒の発達の段階に合わせて、系統的に学習を進めていくことができる。

○学習効率の向上

実態に合った教材・教具が準備され、適切な指導が図られると児童生徒の学習効率が上がる。

教材・教具を作成するときの留意事項

○児童生徒の障害の状態及び能力、特性に応じて工夫する。

○一人一人の発達段階と指導目標や学習課題に合わせて工夫する。

- ① 発達段階に合ったもの
- ② 「できた」という成就感があり、またやってみたいと思うようなもの
- ③ 結果が分かりやすく、確認しやすいもの
- ④ 興味・関心をひくもの
- ⑤ 使用しても壊れにくいもの（ラミネートをしておくなど）
- ⑥ 安全に使用できるもの

市販されているものもあるが、教材カタログや特別支援学校の教材なども参考にしながら、実態に応じた手づくり教材・教具を作成し、活用していくことが効果的である。授業の目標を常に念頭におき、効果的に活用していくことが重要である。

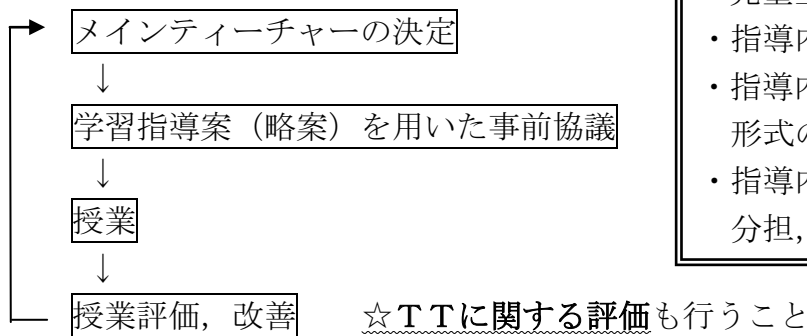
児童生徒一人一人の顔を思い浮かべ、教材・教具を工夫、作成していきましょう。授業の流れをイメージし、教材・教具の効果的な提示について考え、児童生徒の反応を予想します。入念な準備は、授業者自身が授業を楽しみにすることができます。そんな授業を毎回行っていきたいものです。



⑦チーム・ティーチング

チーム・ティーチング（TT）による授業では、児童生徒の指導に関する共通理解や役割分担をしっかりと行い、その場限りの対応や児童生徒の補助や管理に終始しないようにすることが大切である。また、メインとなる教員に任せるのではなく、全員で授業をつくっていくという意識をもつことが重要である。担当の児童生徒の指導にあたりながら、授業全体を見ていく視点も大切である。

【チーム・ティーチングの実施手順】



- ・児童生徒の実態についての共通理解
- ・指導内容及び指導方法の共通理解
- ・指導内容や学習形態に応じたTTの形式の検討
- ・指導内容・方法の打ち合わせ，役割分担，教材・教具の作成

【チーム・ティーチングの例】

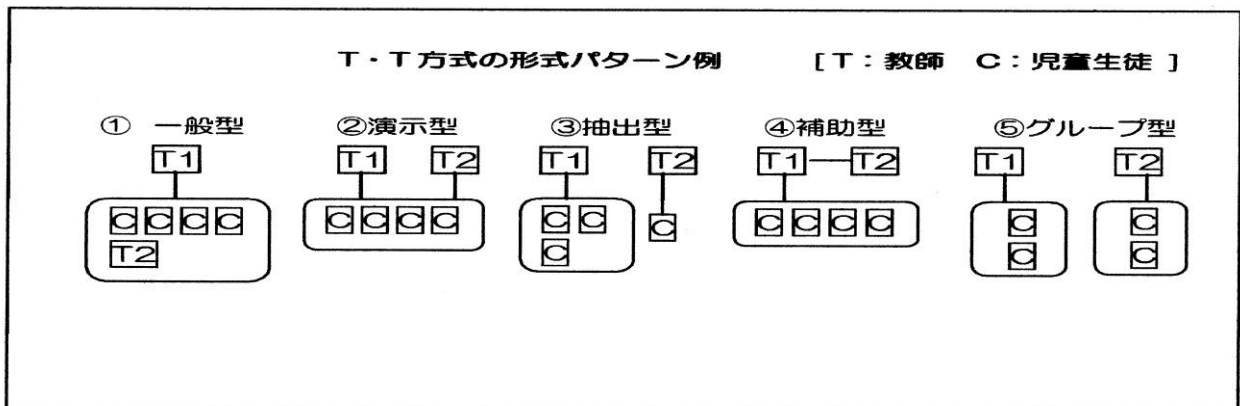
○交流学級や特別支援学級合同での授業の中で・・・

メインとなる教員が全体への指導，サブとなる教員が個別の言葉かけをする。

児童生徒を小集団に分け，それぞれの集団を担当する。

課題の異なる児童生徒を分担して指導する。

特に配慮の必要な児童生徒を重点的にサブとなる教員が担当する。 など



これらは、学習形態の基本的なモデルである。実際の授業では、児童生徒の目標や支援のニーズ，対応できる教員の数，学習スペースなどによって多様な形態が考えられる。また、授業時間内にこれらの学習形態をいくつか組み合わせていくこともある。目標や課題に応じて学習形態の組み合わせも様々に工夫することが重要である。

⑧評価の工夫

授業を実施した際は、その都度、評価を行い、指導内容や方法を改善し、より効果的な指導を行うことが必要である。評価の際は、児童生徒の姿を評価するとともに、目標等の妥当性など、教員の指導についても十分評価していくことが重要である。

【教員が毎回の授業で行う「授業評価チェック表」】

授業内容が、本当にその児童生徒の課題に沿っているのか、目標設定は妥当であったか、指導内容や方法、教材・教具は適切であったか、個に応じた有効な手立てであったか等、教員自身の指導に関する評価も十分に行い、授業改善につなげていく。

【児童生徒が毎回の授業で行う「自己評価表」】

この時間で何を学習したのか、何ができるようになったのか、次の時間には何を目標にしたらいいいのか等、児童生徒が明確に把握できるような自己評価表を用意する。

筆記が困難な児童生徒には、他の手段（写真、図、マーク等）で表す工夫も必要である。

【児童生徒が活動の後などに行う「他者評価・相互評価」】

他者から良かった点や改善点等をあげて評価してもらうことで、自分では気付かなかった自分自身のよさや課題を知り、意欲の向上につながる。

【継続的な評価にするために】

評価は、積み重ねることが大切である。そのためには、継続できる評価表の作成が必須である。評価をすることが負担にならないように、ポイントを絞って、簡単にチェックできるものを作成したい。

【評価について】

<どの程度できればよいのか、可能であれば数値を示すとよい>

- ・持続時間（その行動が持続している時間） ・潜時（5秒以内、2分以内・・・）
- ・頻度（5回中4回・・・） ・継続回数（5回以上・・・）
- ・割合（8割以上、90%・・・） ・距離や歩数（5m以上、10歩以上・・・）

チェック

あいまいな表現は避ける

(例)「集中して漢字を書くことができたか」 ×

→ 「漢字練習帳に1ページ漢字を書くことができたか」 ○

「音読にしっかりと取り組むことができたか」 ×

→ 「3分間、声を出して本を読むことができたか」 ○

「頑張って」「きちんと」「ていねいに」「落ち着いて」・・・×

具体的に誰が見ても同じ評価になるように



(3) 「特別支援学級スタート応援ブック」【授業実践事例編】について

授業づくりの8つの視点をもとにして、様々な工夫やアイデアを凝らした授業の実践事例を紹介している。学習内容はもちろん、目標、評価、支援の手立て等の具体的な表記の仕方、教材・教具の工夫、活動の展開の仕方、場の工夫、ティーム・ティーチングの工夫等、校種や障害種にかかわらず、参考となる内容を12事例示した。

紹介する事例は、次の表3のとおりである。

表3 応援ブック【授業実践事例】の内容

実践番号	教科等・単元（題材）名	校種・障害種
実践例 1	算数「重さを調べよう」	小学校知的障害特別支援学級
実践例 2	生活単元学習「転校した友だちを元気づけよう」	小学校知的障害特別支援学級
実践例 3	自立活動「いろいろな顔」	小学校自閉症・情緒障害特別支援学級
実践例 4	自立活動「ペットボトルボウリングをしよう」	小学校自閉症・情緒障害特別支援学級
実践例 5	算数「あまりのあるわり算」	小学校言語障害特別支援学級
実践例 6	国語「漢字の広場」	小学校言語障害特別支援学級
実践例 7	自立活動「ことば遊びをしよう」	小学校言語障害特別支援学級
実践例 8	国語「かるたのひみつを読もう」	小学校言語障害特別支援学級
実践例 9	作業学習「オルゴールボックスを作ろう」	中学校知的障害特別支援学級
実践例 10	自立活動「上手に聞こう」	特別支援学校高等部
実践例 11	総合的な学習の時間 「和（日本文化）を味わおう」	特別支援学校高等部
実践例 12	数学「ボウリングをしよう」	特別支援学校中学部

1つの事例は、4ページ構成となっており、12の事例が同様の形式でまとめてある。また、写真やワークシート等も紹介しながら、分かりやすく参考になるものとした。実践事例の見方については、次のとおりである。



授業実践事例の見方について



実践例1 算数「重さを調べよう」

小学校知事障害者特別支援学級

1 ページ

1 単元名 重さを調べよう

<児童の実態> 男子2人(小3:2人)

- ・既習の加減算はできる。長さをリットルで表したりする等、単位を混同してしまう児童がいる。
- ・細かい目盛りを読むことが苦手な児童がいる。
- ・視覚的な手がかりによって注意を向けやすくなったり、理解が促進されたりする。

2 単元の目標

- 身のまわりの具体物の重さを、はかりを用いて測定することができる。重さが測りにくい場合は、重さについての加法や減法を適用して、重さを求めることができる。(技能)
- はかりの目盛りの読み方や使い方、長さ、かさ、重さの単位のしくみが分かる。(知識・理解)

3 本時の指導

(1) 目標

- 減法を適用して、容器に入っている小豆の重さを求めることができる。
- 加法を適用して、小麦粉や砂糖をレンジ通りの重さに測り取るることができる。
- 一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。

(2) 展開

学習の内容及び活動	児童生徒への手立て<全体、個別>
1 本時の課題を知る。 ④ そのままはかりにのせることが むずかしいものの重さもとめる	・細かい目盛りを読むことが苦手な児童が、自信をもって学習に取り組めるようにするために、本時の学習ではデジタルのはかりを使用する。
2 容器の中の小豆だけの重さを計算 で求める。(180g-100g=80g)	・児童の様子を見て、必要ならば、教師が図を使いながら説明することで、小豆だけの重さを求めるための考え方の手がかりがつかめるよう支援する。
3 小麦粉100gと砂糖30gを測り 取る方法を考え、発表する。 ④ 100gの容器に100gをはかり、砂糖を 加える	・お楽しみ会で作る「ほろほろクッキー」のレシピを見せ、測り取る物として、その材料を用いることで、学習に対する意欲を高める。
4 小麦粉100gと砂糖30gを、実際 にはかりを使って測り取る。	・児童の様子を見て、必要ならば、小豆の重さを求めた順を再確認したり、教師が図を使いながら説明したりで、考えの手がかりがつかめるよう支援する。
5 本時の学習を自己評価する。	・自己評価は、ノートに書いた本時の課題の右側に、△等を使って記入するよう指示しておく。 ・自己評価が低かった時は、その理由を児童に尋ねることの理由を探り、次時以降の学習に生かす。

4 評価

- 減法を適用して、容器に入っている小豆の重さを求めることができたか。
- 加法を適用して、小麦粉や砂糖をレンジ通りの重さに測り取ることができたか。
- 一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができるか。

2 ページ

事例番号、教科・領域名、単元(題材)名、校種・障害等が分かるようなタイトルにしています。

指導略案を示しました。児童生徒の実態に基づき、どのような授業を实践したのかが分かりやすくまとまっています。目標、評価、支援の手立てが具体的に記されていますので参考にしてください。

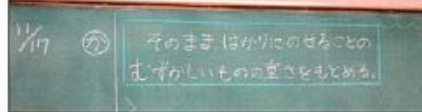
①実態把握、目標設定の工夫 個別の指導計画に基づく本時の目標の設定

個別の指導計画の指導目標に基づいて、本時の目標を設定した。

個別の指導計画の指導目標(抜粋)	本時の目標
○学習した四則計算の技能について、④割正音で	○一の位が0の、3位数-2位数や3位数+2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。

①実態把握、目標設定の工夫 児童が自己評価できるような、児童向けの目標の提示

授業の最初に、「授業の終わりにどうなっていれば目標が達成できたといえるのか」を、児童自身が判断できるように、具体的な児童向けの目標(右写真の④「課題の巻」)を授業の始めに提示した。また授業の最後には、目標が達成できたかを自己評価する時間も設定した。



⑤特性に応じた支援 得意なところを生かし、苦手なところを補う工夫



この授業を受けている2人とも、視覚的な手がかりによって学習がスムーズに進む児童である。そのため、課題配付の際、空の容器をはかりに載せ、容器だけの重さを確認し、次に、その容器に小豆を入れてみせながら、小豆だけの重さを測ることが課題であることを伝えた。このように、実践したり、目で説明したりといった、視覚的な手がかりを多用することで、課題把握がスムーズに進んだ。

細かい目盛りを読むことが苦手な児童のために、この実践では、上皿はかりではなく、デジタルのはかりを使用した。これにより、児童が本時の学習に対して苦手意識をもつことなく、積極的に取り組むことができた。

授業づくりの8つの視点の中から、この授業で特に力を入れた点、工夫した点等について、活動の様子や板書、教材等の写真を紹介しながら、説明しています。この授業のウリともいえます。様々なアイデアがとても参考になります。丸数字は、便宜上つけた8つの視点の番号となっています。

授業の視点シート

3 ページ

授業の視点	工夫したことや配慮したこと
① 実態把握 目標設定の工夫	① 実態把握、目標設定の工夫 ◎個別の指導計画に基づく本時の目標の設定 個別の指導計画の目標をもとに、本時の目標を設定した。毎時間の授業の目標が、個別の指導計画と関連したものになってこそ、一貫した指導が展開できるだろうと考えた。
② 場の工夫	◎児童が自己評価できるような、児童向けの本時の目標の提示 特別支援学級で学ぶ児童生徒だからこそ、1時間の授業の目標を児童生徒が理解できる言葉で教師が明示して、児童生徒が目的意識をもって授業に臨めるようにしたい。目標は、授業が終わったときに、達成できたかを児童生徒自身が評価できるよう、できるだけ具体的なものにするよう心がけている。
③ 導入・展開・まとめの工夫、単元計画	⑤ 特性に応じた支援 普段の生活や学習の様子を観察したり、知能検査等を活用したりしながら、児童の認知面で実態を把握するよう心がけた。その結果をもとに、児童が自信をもって授業に臨めるよう、得意なことを苦手なことを補う支援を考えた。
④ 発問・応答・賞賛などの言葉かけの工夫	<得意なことを生かす支援> この事例の児童は2人とも、知能検査によって、視覚的な手がかりを活用した学習が効果的であると思われました。そこで、実演してみせる、図や絵を使って説明する、目標や課題を口頭だけでなく文字で黒板に明示する、といった視覚的な手がかりを効果的に用いて授業を進めるようにしました。
⑤ 特性に応じた支援	<苦手なことを補う支援> 一人の児童は、視力が正常でも、細かい日盛りを読むことに困難さがありました。そこで、細かい日盛りを読まなくても重さが測れるように、デジタルのはかりを使用しました。 本時のねらいは、加減法を用いて重さの計算をすること、上皿はかりを読むことではあるが日常生活ではデジタルのはかりを使うことが多いという現状も考慮しました。
⑥ 教材・教具の工夫	
⑦ ティーム・ティーチング	
⑧ 評価の工夫	

左側は、授業づくりの8つの視点から、この授業でのウリとするもの（2ページで紹介した視点）を水色で示しました。

右側には、取り上げた視点について、どんな工夫をしたのか、それはどうしてなのか等、さらに解説を加えました。より「なっとく」していただけたと思います。

4 ページ

このページは、自由コーナーとしました。授業づくりの8つの視点に限らずに、この授業をとおして、伝えたいことや紹介したいこと等を自由に示しました。

授業づくりのコツ、ワークシートの紹介や教材の作成方法など、参考になる情報が盛りだくさんです。

ワンポイントアドバイス！

せっかくつくった個別の指導計画だから…、授業に生かそう！

個別の指導計画をつくったあとは、個人情報だから学校のカギ付き書庫で大切に保管しておしまい、というのではもったいない！せっかくつくった個別の指導計画は、日々の授業に積極的に活用しましょう。

活用する方法はいくつかあると思います。その一つが、個別の指導計画に書いた目標を意識しながら、毎時間の授業の目標を設定することです。

例えば、この実践では、

個別の指導計画の目標（抜粋）	本時の目標
○学習した西側計算の問題について、9割正答できる。	○一の位が0の、3位数－2位数や3位数＋2位数の計算を間違いなく正確にすることができる。

というつながりを意識して、目標を設定しました。

国語や算数で学習したことを、生活場面で生かそう！

通常の学級の授業ならば、問題文を読んで、解き方を友達に説明して、答えを求めたら課題達成となることが多いです。でも、この授業では、学習したことを生活場面で生かせるよう、生活単元学習の内容と結びつけた活動を取り入れてみました。

学期末のお楽しみ会では「ほろほろクッキー」を作ることを計画していました。そこで、この授業では、レシピを見ながら材料を測り取る練習をしながら、重さの加減算の学習を進めました。



そして、この授業の数日後に行われたお楽しみ会では、子どもたちは、この授業で学んだことを生かして、材料を正確に測り取ることができました（一緒にクッキーを作った下級生に、材料の測り取り方を得意げに説明している姿が印象的でした）。

このように、国語や算数で学んだことが、生活場面で生かされるような学習を取り入れられることは、特別支援学級ならではの面白さであり、醍醐味だと感じています。

4 研究のまとめと今後の課題

本研究の目的は、主に経験の少ない特別支援学級等担当者が抱える課題を調査し、ニーズを把握して、学習指導や学級経営を進めていく上で、参考資料として活用することができる手引書を作成することである。

本県においては、これまで特別支援教育に関する様々な冊子や研究報告書、リーフレット等が発行されているが、児童生徒一人一人のニーズに応じた指導を充実させるために、より具体的で実践的に活用しやすい手引書を望む声も聞かれるところであった。

今回、質問紙調査において、新任の特別支援学級等担当者が抱える悩みや疑問を明らかにし、ニーズに応じた手引書「特別支援学級スタート応援ブック」を作成できたことは大変意義深く、日頃の課題解決はもちろん、新任の特別支援学級等担当者の授業力や学級経営力の向上に向けて、大いに役立つと考える。「応援ブック」は、「学級経営編」「授業づくり編」「授業実践事例編」と3部構成にし、充実させたことで、幅広く必要な情報を得られるようにした。特に「授業づくり編」を充実させたことは、経験の少ない担当者だけでなく、特別支援学級に関わるすべての教員に活用できるものであると思われる。

今後の課題としては、次の事柄が挙げられる。

- ・より多くの特別支援学級等担当者に、「応援ブック」を活用してもらうこと
- ・本教育研修センターで実施している「新任特別支援学級・通級指導教室担当者研修講座」をはじめ、特別支援教育に関する各研修講座において、「応援ブック」をテキストとして有効活用していくこと
- ・授業づくりの8つの視点について、内容をさらに深めていくとともに、授業改善の視点での実践的研究を進めていくこと

特別支援教育体制の中、特別支援学級等担当者には様々なことが求められているが、まずは、特別支援学級での信頼される実践が基本である。特別支援学級の児童生徒の学校生活づくりや授業づくりに真摯に取り組む姿勢が何よりも大切になると考える。この「応援ブック」を十分に活用し、日々の学習指導や学級経営をさらに充実させていくことで、特別支援学級の児童生徒の生き生きとした姿が、ますます見られることを期待したい。

5 参考・引用文献

- 太田俊己監修 佐藤慎次編著「すぐに役立つ特別支援学級ハンドブック」
全日本学校教材教具協同組合 平成 23 年
- 佐藤 暁著 「入門特別支援学級の学級づくりと授業づくり」 学研 平成 24 年
- 全国特別支援学級設置学校長協会編 『「特別支援学級」と「通級による指導」ハンドブック』 東洋館出版社 平成 24 年
- 太田正巳著 「特別支援教育の授業づくり 46 のポイント」 梁明書房 平成 18 年
- 辻 誠一著 「特別支援教育のコツと技 教師力アップのために」 日本文化科学社
平成20年
- 尾崎洋一郎・草野和子著 「高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその周辺の子どもたち」 同成社 平成 17 年
- 湯汲英史著 「子どもが伸びる関わりことば 26」 すずき出版 平成 18 年
- 山中伸之・内田聡 「できる教師の子どもを変えるステキな言葉」 学陽書房 平成 21 年
- 太田正己著 「特別支援学校の授業づくり基本用語集」 梁明書房 平成 20 年
- 藤田和弘・青山真二・熊谷恵子編著 「長所活用型指導で子どもが変わる」 図書文化
平成 10 年
- 「特別支援教育研究」 5月号 東洋館出版社 平成 24 年



「特別支援学級における授業の実際」

1 研究助言者

国立大学法人筑波大学大学院 教授 安 藤 隆 男

2 研究協力員

那珂市立菅谷東小学校	教諭	藤 田	優 子
潮来市立潮来小学校	教諭	石 田	幸 子
阿見町立阿見第二小学校	教諭	安 藤	尚 徳
常陸太田市立太田中学校	教諭	森	むつみ
下妻市立下妻中学校	教諭	平 吉	亜希子
県立鹿島特別支援学校	教諭	松 沢	晴 美
県立土浦特別支援学校	教諭	熊 澤	つむぎ
県立友部特別支援学校	教諭	海 野	有 美(平成23年度)

3 茨城県教育研修センター

所 長		谷田部	佳 見
特別支援教育	課長	谷田部	孝 子
	指導主事	藤 森	幸 子
	指導主事	奥 岡	智 博
	指導主事	外 山	薫
	指導主事	大 木	勉
	指導主事	羽 成	裕 明(平成23年度)

研究報告書第81号

特別支援教育に関する研究

特別支援学級における授業の実際

—特別支援学級スタート応援ブックの作成—

平成23・24年度

平成25年3月

編集 茨城県教育研修センター特別支援教育課

〒309-1722

茨城県笠間市平町1410

TEL 0296(78)4437 (特別支援教育課)

FAX 0296(78)2122

URL <http://www.center.ibk.ed.jp/>